

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

恥かしい話をひとつ。

今から数年前のこと、あるフランス語の語学雑誌に、フランスの歌を紹介する頁を一年間、受け持つことになった。

フランスの文学を学んだり、フランス語を教えたりしていれば、その背後にあるフランス文化一般、日常生活一般についての知識も多少は身についてくる。とは言っても私の場合、それらは教室で無味乾燥な文法に少々色をそえるのに役立つぐらいで、政治・経済は言うに及ばず、たとえば料理についても歌についてでも、人に語れるほどのものは何も持っていない。それをフランスの歌を紹介せよと言われたのは、何か仕事をさせてやろうという暖かいお志を別にすれば、日頃私が浮ついた顔付きをしているせいに違いない。反省している。

もともと歌でも映画でも漫画でも、ひとつのことに人よりも多少深く通じるようになるためには、とても浮ついた気持などではいられないので、そのようにして文学に加えての余技ながら、ほとんどその道の専門家とも言うべき力量を備えている人が、私のまわりにも何人もいるから尚のこと、自信がないのであった。そんなに自信がないのならお断りしたらよさそうなものだ

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

が、そこがまた私のいい加減なところで、目の前に小路が開けるとなると、ちよつと覗いてみようかな、という気になってしまふ。せつかく言つて下さつたのだから、という思いももちろんある。

自信がないのにお引受けしたのには、もうひとつ理由があつた。歌を選ぶのは私の任ではなく、フランク・ノエルさんというフランス人で、この人は驚くばかりにフランス民謡をよく識っており、しかもほとんど玄人はだしに歌がうまいから、私のするべきことは歌詞に日本語の訳をつけること、そしてほんの数行、文法的にであれ内容的にであれ、解説をつけることだけ、その際分らないことがあれば何でもノエルさんに聞けば良い、というのであつた。

それじゃあ私にもできるかもしれない、ちよつとした通訳かゴーストライターみたいなものだから、と私は簡単に考えてお引受けした。

やがてノエルさんの選んだシャンソンの原稿が届けられ、掲載に先立つて行われる録音に立会つたとき、私はまったくうれしくなつてしまつた。第一に、それら十二の歌のどれひとつとして私の知っているものはなく、しかも、

シャンソンという言葉から私が予想していたものと全然違つて、言うならばひどく古めかしく、ひどく泥臭い感じのものばかりだつたからである。

聞いたこともない歌に解説を付けるなど無謀この上もないはなしだけれども、そこはそれ、はじめから自分の知識や見解を披露する点では匙を投げていたし、とすれば、なまじ日本でも多少は知られた歌であるよりは、いっそ誰も知る人のないものの方が私としても気が楽なのである。事実、十二の歌のうちのほとんどは、そのようにフランスの風土に根づいたまま半ば埋もれて、遠く日本まで流れて来るほどの器用さを持たなかつたもののように思われた。

もともと私は、日本で一般に取り沙汰されている軽妙で洗練されたフランス文化というものに、ある疑いの氣持を抱いていた。フランスのものであれば何でも進んでいて、何でもカッコよくて、何でも上等だなどということがあるだろうか、という思いが心のどこかにあつた。同じようにまごついたり、ドジったり、げんなりしたりしても、それがフランス人のすることとなると

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

何故かしやれて見えるという風潮は、見せる向うか見るこちらのどちらかに問題があると思っていた。

しかし私がかつてフランスでの最初の一年を過ごしたディジョンというところは、それとはまったく違った雰囲気を持っていて、街並も人の表情もどこか暗く鈍重な代りに、それこそぶったたいでもこわれないようなしたたかさを感じさせて、私ははじめてフランス文化の土台にふれたように心丈夫な気がしたものである。

ノエルさんがうたう歌は、たとえばそのディジョンよりもなお一、二時間ほど車を走らせて、見渡す限り眼に入るのは起伏する緑だけというジュラの山中にでも分け入ったところに、不意に出現する小さな村などを背景として思い浮かべながら聴くとよく分る、そんな歌が多かった。

ごつごつとした不揃いの小石をかためて作った家が数軒あるばかりで、まだガスも引かれていないようなところに、街で買った食料を持ち込んで週末だけの田園生活をするというのが、ディジョンのちよつと裕福な勤め人たちの理想的な楽しみだったが、一年を、いや親代々そこで暮らしている人々も

いるのである。

村に着くとあたりは静まり返っていて、フランスではパリと少数の大都市を除けばどこもそんなふうだが、およそ人影というものが感じられない。けれどもそのうちに、ふだんは空家のあの家が今日は街から人が来たらしいと気配を感じてか、ちらりほらりと村の人が顔を覗かせる。向いの家のおじさんは、いつの間にか自分の門のところまでのいで出て、左手にはパイプを握り、右手では太ったお腹をゆっくりと輪をかくようになでている。頭に大黒帽のようなつぶれた帽子をのせているのは、しゃれたつもりか、それともこの人は家の中でもいつも帽子をかぶっているのだろうか。その彼の肩越しに斜め向うのちよつと引つ込んだ家に目をやると、さつきは確か閉まっていたはずの窓が開いていて、ほとんど黒に近い色の服を着た瘦せたおばあさんが、鋭い眼付きで身じろぎもせず、こちらを窺っている。前の家のおじさんは、こちらの会釈に応えてわずかに上体を傾け、その反動で前よりも一層お腹を突き出したが、しかしそれ以上近づこうとはせず、さりとて家に入ってしまった

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

うわけでもない。その代りに、白っぽいブラウスを着た十五、六の少女がひとり、何も言わずにこちらの庭木戸を押して入ってきて、気がつくともう私たちのすぐ傍に、たとえようもなくのどかな笑みを浮かべて立っていた。

街から来た週末だけの隣人は少女に向かって、まるで赤子に対するような物言いとその両親の様子を訊ね、それから横を向いて、

「ほんとうに、こういうお子さんを持った親御さんの気持を思うとねえ…、この娘、知恵おくれなの」

と言ったが、そう言われるまで、私にはそのことが分らなかった。無口な老人と、少女の他愛ない笑みと、周囲の静けさとは、ほとんど区別し難いほどに揮然と溶け合っているのであった。

そんな人々が歌うとすれば、あるいはそんな人々の中に、ふだんはひどくはにかみ屋で引つ込み思案だが一旦歌い始めると思いもかけない美声を響かせる青年がいたとして、彼がそのときばかりは恥じらいもせず歌い続けるとすれば、それは、あのノエルさんが歌ったような、一種単調で物哀しい調べになるのではないかと思われた。メロディもリズムも、理性的な五線譜から

どこかはみ出してまうようなところがあって、まぎれもなく西洋音楽であるはずなのに、奇妙にも日本の民謡と相通じるものを感じさせる。

こうした歌は、歌詞にも方言がまじっていたり、分るようで分らないということがあるけれども、それは日本の民謡などを聴いていてもそうだから、私は初手から諦めて、無責任に徹することにしていた。

それにおかしな話だけでも、こういう時に限って、いくらノエルさんに質問しても埒があかないのである。こちらは何が分らないかということがうまく説明できないし、向うもまたそのへんを明瞭に分析できないらしい。それはそうだろう、私たちが日本の民謡の掛け声なんかをフランス人に明瞭に説明しなければならなくなったら如何な窮地に陥るか、それを想像すれば無理もないことである。挙句の果てに、

「なんでも良いから適当に書いたら？ どうせ日本語の歌詞なんて、たいして重要じゃないんだから」

と、いったい御当人は日本語が読めるのかどうか知らないが、勝手なこと

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

を言う。

もともと彼にとって唯一気になることは、その訳詞はメロディーに乗せて歌えるものであるかどうかということだったのだが、その答えが「ノン！」であるとは知ってからは、一切の関心を失った。

そこで私はお言葉通り適当にやらせていただくことにしたけれども、そういう勝手気儘な部分に関しては、幸いなことにどこからお叱りを頂くことはなかった。少くとも私の耳には届かなかった。

問題は私にとって最も分りやすく思われる歌から発生したのである。

一年分の歌の中に『水夫が戦争から帰るとき』という歌があった。初めに言ったように、私は十二の歌をひとつも知らなかったのだが、この歌だけは初めて聴いたときからとても馴染み易く、一般的な意味でフランス的だという気がした。それも道理で、この歌は日本でも知る人は知っている、つまりポピュラーな歌だったのである。ノエルさんに言わせると「ボクはあんまり好きじゃないんだけど、でも有名だから」選んだのだそうである。

その歌詞は、私の拙い訳によると次のようなものになる。そんな有名なも

のにわざわざ頁を割くこともないようだが、なにしろ私自身が知らなかったことではあるし、後で少々細部にこだわる必要も出てくると思われるので、敢えて御眼を汚させて頂く。

1 水夫が戦争から帰るとき

ひどい靴にひどい服

勇敢な水夫さん あんたどこからおいでかい？

2 マダム わたしは戦争から帰ってきた

早く白ぶどう酒をくださらんか

水夫が通りすがりに呑むために

3 勇敢な水夫は呑み始める

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

吞んで　そして歌い始める
美人の女将はためいきついた

4　ああ言っておくれな　美人の女将
あんた　白ぶどう酒が惜しいのかい
水夫が通りすがりに吞んでいくのが？

5　あたしが惜しいのはぶどう酒じゃない
それはあたしの亭主の死
だんな　あの人に似てなさる

6　ああそう言や　美人の女将
あの頃あんたにやこどもが三人
そして今見りや四人のこども

7　あたしは嘘の手紙を何度も貰った
あの人死んで葬られたと
それで再婚してしまったのさ

8　勇敢な水夫はグラスを干すと
お礼も言わず泣きながら
自分の船にもどっていった

毎度のことながら訳していて気になったのは、字余り、あるいは字足らずふうにリズムの悪いところで、どうせメロディーに合せるわけではないのだからどうでもいいとは言うものの、ある種の調子の良さのようなものを出したい気として、四苦八苦した。訳詞というのは妙なもので、ギクシャクしているのはもちろんまずいけれども、あまりに日本語としてリズムが出来上っ

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

ているのも翻訳らしきという独特の風味に欠けるようだし、それに何とか借越なようにも思われて、気色の良いものではない。

もうひとつ気になったのは「女将^{おかみ}」という言葉のことである。これはふつう高級な料亭や待合などの女主人を指している言葉で、「ひどい靴にひどい服」の復員兵が「通りすがりに」一杯ひっかけていく、たとえば赤ちようちんか一膳飯屋で、自ら客に給仕するひとに対して言われるものではない。言うなら「……さん」づけの「おかみさん」か、あるいは現代風に「ママ」の方が相応しいだろう。それでも何だか「女将」と言ってみて、まずいかなと思いつつも最後まで変える気にならなかったのは、先に言ったりズムの上の理由がひとつ、それとこの物語ふうのシャンソンの女主人公にある風格をそえてやりたいという気があったせいだ。ストーリーのあるシャンソンはそう珍しくないが、これほど存在感の濃い人物像を含んでいるのは、そう多くないのではないだろうか。

そしてもうひとつ、「女将」を捨てられなかった秘かな理由は、明治・大正の芝居や小説などで眼にするだけで、実際の日常ではまったく口にする機会

のないこの言葉を、一度は使ってみたいものとかねがね思っていたからである。

まだまだ言えばきりが無いが、いずれにしても身にしてみ分ったことは、翻訳、それも多少韻文ふうなものの難しさということ、それまでは語調がどうの、この言葉の使い方はどうのと、心の中でぶつぶつ言うこともあったのだが、それからというものの、他人^{ひと}の訳した詩句を見ても、ただひたすら感心するばかりで、一言もケチが付けられないようになってしまった。こんなに簡単で、さして芸術的とも言えない数行にもそれなりの苦勞があるとすれば、名だたる詩人の訳業など如何ばかりのものであるうか。

チヨコツと嚙^かってみても何ら経験というほどのものは身につかないが、その分だけ確実に謙虚にはなる。それともその謙虚さを、俗に人は経験と言っているのだろうか。

そういうわけで、訳詞のほうはまことに気持の整理のつかない状態だったが、これは毎度のことで仕方なく、しかし解説と称された雑文の方は別段の

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

こともなくて、どうでも良いようなことをチヨコチヨコと書いて提出した。
ところが、それが実はどうでも良くはなかったのである。

何日かして、この雑誌の監修スタッフのひとりであるI先生からお電話を頂いた。私がそえた文章によると、歌の中の水夫とマダムのは別人だと考えているようだが、あれは同一人物ではないか、とおっしゃるのである。

私はびっくりした。確かに私は別人だとばかり思っていたのだが、それが同一人物だと言われても、直ぐには納得がいかない。暫らく時間を下さいとお願いして、私は一旦受話器を置いた。

さてそれから心を落着けて歌詞と向かい合ったのだが、思い込みというのは本当にしぶといもので、一度出来上ったイメージはどうにも改まろうとはしてくれない。まして問題は人物である。私の頭の中には既にマダムの夫と水夫の二人がまったくの別人として存在を確立してしまっていたものだから、それがひとつに重なり合うのは、とても無理な相談であった。I先生が言われるのだから間違いはないとは分っているのだが、思い通りにならない自分の想像力の方もまた、私にとっては動かし難い迫力を持った現実である。する

うちカッカとしてきて、何が何だか分らなくなる。少し頭を冷やそうと他のことを考えて、それからまた考えを元に戻す。すると私の頭の中の二人の男は、しばしの休息に力を得たのか、前よりもっと明確に分離して立っているのだった。自分で自分が思い通りにならないとはあのときのことだ。まったく、あのときのことを忘れない限り、教師たる私は、教室でいかに度し難くいかに頑なな誤解に直面したとしても、寛大さを失うことは許されないというものである。

再び電話に向かったとき、私はほとんどヤケクソだった。どうしても同一人物のように読めませんと私が言ったのは、決して自説に固執してのことではなく、むしろその言葉通り何としてもそうは読めない悲哀を訴えたというのが正直なところだったのだが、はたしてI先生は何とお聞きになったか。

そうですか、それも一つの解釈かもしれませんから、そう穏やかにおっしゃったが、しかし内心なんと思われたか、数年を経た今でも時点思い出している、顔から火の出る思いである。

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

もつとも、そう言ったときの私にはそれなりの言い分が無いではなかった。一旦こうと思ひ込んだらあとはテコでも動じないという程に、だいいち私の頭脳は安定度が高いわけでもない。

私はこう思ひをめぐらしたのである。なんだった？ この水夫がマダムの方だつて？ そんなおかしいことがあるだろうか？ とすれば、この男は自分の女房の店へ帰つてきて、他でもない女房に向かつて、まるで一見の客みために白ブドウ酒を注文したのか？ それも、「水夫が通りすがりに呑むために」とか何とか言いながら？ そして暢気に歌なんか歌つて、マダムがためいきをつくと、「あんた白ブドウ酒が惜しいのかい？」などと訊ねたのか？ もちろん、冗談には違ひない。客に酒を吞ませて儲ける人間が、その酒を惜しんでためいきをつくわけがないから、水夫の言葉が冗談であるのは分りきつてゐるのだが、しかし何年振りかで戦争から帰つてきた亭主が女房に向かつて言うにすれば、冗談も度が過ぎるというもの。いや、間が抜けてるとさえ言えるだろう。しかもこうした科白を言い合うのに、この男女は互いに相手のことをvousと他人行儀な言い方で呼んでいるのである。

しかし水夫は、マダムが以前は三人の子持ちであつたということを知っているではないか、つまり二人は見かけほどには赤の他人ではないのだ、という意見もあるだろう。たしかに、彼らは本当の初対面というのではないかもしれない。が、だからと言って夫婦だということにもならないのはあるまいか。前に一、二度立ち寄つたことがあるのかもしれない。それに四人目の子どもだつて、ああそれは隣の子がたまたま遊びに来てゐるだけで、ということだつて無いとは限らないのだ。少くとも、前半の二人の不自然さを帳消しにするほどの説得力があるとは思われない。

それよりも、マダム自身が「だんな、あの人に似てなさる」と言つてゐるのだから、それを信じたら良いのではないだろうか。それじゃあ水夫はなぜ泣きながら船へ帰つて行つたんだつて？ さあ、もらい泣きでもしたんじゃないでしようかねえ、身につまされて。本当に戦争というのは、平和に暮らしている名も無い庶民を、思ひもかけない悲劇に巻き込むものですからねえ。アレ、ひよつとして、これもまた反戦の歌のひとつだったでしょうか？

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

というわけで、「夫を戦争に奪われ、再婚してもなお通りすがりの水夫に愛する男の面影を追う女の切なさ云々」と私が、これこそ蛇足以外の何ものでもない文章で述べたところの図式が出来上ったのであった。

まったく、「有らずもがな」とはこのことで、もしも私が付け加えてつまらぬことを書いたりしなければ、日本語の歌詞自体ではとりたてて問題は起きなかったに違いない。だから、私が犯した誤ちは正確には誤訳ということではなくて、I 先生が言われたように解釈上の誤ちなのだが、しかし翻訳という作業とまったく無関係かと言えば、そうとも断定しきれないように思われる。今のようにたかだか二十数行の歌詞ならともかく、小説などの場合には、状況の把握が不正確であったり、不完全であったりすることによって、文章のごく細かい部分のニュアンスに狂いの生ずることはあるだろう。そういう時、表面的な訳文そのものはあながち誤りとは言えないにしても、やはり正しい翻訳とは言えないはずだ。それどころか、時としては副詞の一つ二つをすっ飛ばすよりもずっと重大なことになりかねない。つくづく翻訳というのは難しいものだと思うが、こういうことは私よりも私の周囲の先輩の方がは

るかによく知っているので、これ以上言うことは差し控えることにする。

それよりも問題は私自身の誤解の成行である。

このように屍理屈をこねたからと言って、私がいつまでもその「解釈」に固執したかと言えば、そうではない。I 先生からお電話のあった時点で、私の頭は自分の誤りに関してすでに観念してしまっていたのではないかとも思う。しかし気持が、あるいは想像力がそれについていけなかったのである。

本当は、こういうたぐいの誤解は、あるとき電光石火のごとくひらめいて、ああ、そうかあ！と膝でも叩きたい程の思いで納得するのが実に感動的で良いのだが、なにしろこの時は、最初に与えられた決定的なチャンスを逃してしまった後なものだから、あとはネチネチと恨みがましく、もうひとつの「解釈」に馴染んでいくほかないのであった。

それはまったく、私としてもあまり経験のないような苦々しくも腹立たしい我れと我が精神にとつての苦役だったが、しかしその緩慢なプロセスのおかげで、私はそれまであまり深く考えてみなかったことを、改めて考えてみ

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

る機会を得たのであった。

第一に考えたことは、幾つかの不合理的な点にもかかわらず、水夫がもと亭主であるということが可能になるのは何故か、ということである。まったく白紙で二人の会話を辿る限り、第5節までは、彼が夫自身であることを想定させる要因は皆無であるばかりか、むしろそれと逆の方向に作用する科白ばかりが並んでいる。それに続く3節にも、それについての決定的な反証はない。どのようにも解釈できる表現ばかりである。むしろ、どうにも取れるというその自由を重要視しているという趣きさえ感じられる。そうではないだろうか、もし二人が夫婦であったということの説得する気があるのなら、あるいは少くとも明言する気があるのなら、ほんのひと言、何か決定的な言葉を添えるだけでよかっただろう。しかしそれをしないということは、する気がないということ、それはつまり、する必要がないということである。

なぜ必要がないのだろうか。ほんのひと言いつてくれてもよきそうなのに（私みたいな読者もいるのだから）、それを故意にも黙否を続けるのは何故だろうか？ 黙否ばかりか、その反対のアリバイばかりを並べたてるのは何故だ

ろうか？ 得体のしれぬ悪意さえ感じられるではないか。

たしかに必要なないのだ。何故か。それは既に全員がそれと知っているからである。全員が、もう初めからそうに違いないと決めこんでいるからである。

このシャンソンを楽しむ人々の精神の深層には、ある型が存在している。その型というのはひとつの簡略なストーリーであって、戦争に行つて長い間不在であった夫が、ある日見る影もない姿で戻ってくると、彼の戦死を信じた妻は、既に再婚してしまつていた、というものである。

そうしたストーリーの原型とでも言うべきものは、もちろんこれひとつに限られているわけではなく、ほかにも数多く存在しているに違いない。それらの型の各々を、人は幼いときから世間話やら三文小説の切れ端やら、あるいは今の場合のようにポピュラー・ソングや、現代流に言えばテレビ・ドラマなどで繰り返し見聞きすることによって、頭に叩き込んでいく。そしていつか、ちょうど成長するにに応じていつの間にか社会的な挨拶のやりとりを覚

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

えるように、あるいは日常的な身ぶり手ぶりを自分のものにしていくように、精神的なというよりはむしろ肉体的などと言った方が良い、それほど無意識的な行動原則として修得してしまうのではないだろうか。

そのようにして一人前になると、向うから見知った人が来れば無意識のうちに笑顔を作ったり手を差し出したりするのと同じように、簡単な一言半句をも微妙に反応しないでは受け入れられなくなる。「水夫が戦争から帰る」とか、「ひどい靴にひどい服」とか言われると、心の中に眼に見えないほどの電磁波がさやさやと作用して、しかし適確に、ある特定のストーリーを受け入れるべく磁場を作る。

初めから知っている、と私が言ったのは、そのような集団的訓練を受けた後は、ということ、なにも人は生まれながらにして、この水夫はマダムの夫であることを知っているというのではない。そうではなくて、たとえこの歌を初めてきいたとしても、そういうふうに精神にある磁場を作りつつ聴くようになるということ、そしてそのように聴かれるためにこの歌はある、ということなのである。

頭の中にそういう磁場を作る能力は、決して限定された一部の人へのみ備わっているものではあるまい。というのも、これは取り分けて知的でもなんでもない、ごくありふれたポピュラー・ソングである。誰もが分る歌である。

しかし、誰もがというのは厳密には誰のことを言っているのだろうか。人間ならば誰もが、ということだろうか。でも私には分らなかった。

それは言うまでもなく、先に言ったような行動原則を身につけた人ならば誰もが、ということだ。小さい時から幾つもの原型を頭に叩き込まれ、それに対する然るべき反応を習い覚え、いつの間にか無意識的に行動できるようになる教育された人ということである。そしてそれがフランス人であるということなのである。それも国籍や血統によってフランス人ではなく、文化的にフランス人であるということなのだ。

そのようなフランス人であれば、この歌を然るべき先入観をもって聴くことができる。誰もが、初めから、それと（つまり水夫が夫であると）知っていて楽しむことができるのである。

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

ひとつの文化というのは、つまるところ約束ごとの集積ではないか、と最近考えるようになっていく。それも一つや二つの約束ではない、無数の約束の複合である。しかもそれらの約束は一見してそれと分るようなものではなく、ほとんど無意識になってしまふほどに、あるいはそれが本来的なものだと勘違いしてしまうほどに、良く修練され、体得されたものだ。人はいかにそれについて語ることが少ないが、それは故意に語らないというよりも、それについて意識的に考えることがほとんど無いからである。

考えないにもかかわらず、それに従って行動し、従わない者を野蛮人、田舎者としてはっきり区別する。いわゆる洗練された人が時に陰險だと批難されることもあるのも、そういう理由によるのだろう。洗練された人間は自らの行動のルールを明らかにしないために、ルールを知らない人間から裏があるとされるのだが、それは陰險だからなのではなくて、それを当然なこと、説明するまでもないことと思っているからなのである。裏があるのは事実だが、彼は彼なりに純真でないわけでもない。

たとえば小説などについても、それは同じことである。詩とかシャンソン

とかいった（二つを一緒にするとは何たることかとお叱りを頂くかもしれないが）軽やかなものは私はどうも苦手で、その代り言葉が錯綜して何とも腰の重い小説にはついこのめりこんで、その挙句自分でも何が何だかわらない恍惚とした状態に陥るのを好むという変な癖を持っているのだが、今回も、件のシャンソンから出発して、結局、話は小説の周辺にとぐるを巻くことになりそうである。

小説について語るとき、ふた言目には出てくるのが、小説は形式も内容もまったく自由だということである。何を書こうが、どう書こうが、小説家はすべてが許されていると言う。しかし、それは真実ではない。小説も、他の一切の文化的現象と同様に、無数の約束があつて、小説家はその約束にがんじがらめになって四苦八苦しているものだということを、私は近頃になつてうすうす感じるようになってきた。ただし、四苦八苦しているということこそ小説家自身がどの程度に自覚しているか、それは一概に言えることではない。案外、がんじがらめになればなるほど本人の気持は楽かもしれないから、

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

奇妙と言えば奇妙である。

確かに、理論上は何を書くのも自由である。

しかし、なんのかの言っても、小説もまた他の一切の人的活動と同じく、他者に拘い取られることによって、言い変えるならば、それを為した人間の手を離れ、彼のものでなくなることによって、初めてその存在を成就するものであることは否定できない。言わばキャッチ・ボールのような性格をどこかに持っているものであって、投げたボールは何らかのかたちで返して欲しい。ひどい悪球であるにしろ悪口であるにしろ、やはり投げ返されることを予測しているのである。

相手側について言うならば、一応まともなボールなら、これを投げ返すことが要求されている。それを、投げ返すことをせず、祇めたり囁ったり、ただ眺めているだけだとしたら、キャッチ・ボールは成立しないし、ボールはボールとしての存在をまっとうすることができない。小説について言うならば、こういう犬か赤ん坊みたいな読み手は、いまだ小説読みとして一人前になっていないということである。一人前の小説読みと言っても、学者や評論

家などという偉い人のことを言っているのではない。あなたよりもはるか「にものを知らない、ふつうの読み手のことを言っているのだが。

そこで、せっかくのボール遊びなら面白くしようじゃないかという気が、当然ながら起こってきて、そのための技術も磨けば規則も作ろうということになる。投球も、ただ打ち易いばかりではつまらないから、ちよつとやそつとでは打てないように、できるだけ相手の意表をついたものと、苦心することになる。

こうして一人前になった小説読みの精神には、経験がもたらしたところの無数の約束や規則が、複雑な網の目を構成していると考えて良い。そして、人並の運動能力とある程度の経験を持った人がひとつの投球に対して無意識に身構える、それと同じように、一言半句の言葉に対しても頭の中の神経網が即座に準備態勢をとるようになるのである。

いっぽう書く側の人間にしても、もともとボール遊びが大好きだからこそそういう仕儀に立ち至ったのであろうから、喜々として身構える相手を前に

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

して、彼と共有する幾多の約束に順応して行動しないことは難しい。妙な言い方かもしれないけれども、人情として難しい。

こうして出来上る規則や約束が、たとえば馴染みの原型的なストーリーであったり、常套的な言い回しであったりするのだろう。キャッチ・ボールに限らず、テニスでもバレー・ボールでも、およそボール遊びが大好きな人と同様に、物語的運動神経はごく些細な動きをも見逃さない。そして、「水夫が戦争から帰る」と言われて第一段階の大把みな予測を立て、「ひどい服にひどい靴」と聞いてもう身構える。彼はもうその時、来たるべきものを十分に知りぬいているのである。

さて、そのように考えた上で、あらためてフランス文学を見回してみると、私のごく僅かな知識のなかにさえも、件のシャンソンの兄弟か従妹かと言いたいような例が幾つかあることに改めて気づく。

たとえばモーパッサンの『帰郷』という短編。最初の情景描写のあと、物語はこうして動き始める。

入口でつづりものをしていた小娘が、いきなり呼んだ。

「かあちゃん！」

「なんだよ？」

「あの人、また来たよ」

朝から母娘は気がかりでなかった。一人の男が家のまわりをうろついているのである。それも、乞食みたいな風態の、年とった男なのだ。（青柳瑞穂訳）

海で死んだと思われていた漁師の夫が帰ってきたとき、女房は再婚していて、新たに赤ん坊が増えているところまで同じである。クラシック・ガルニエ版の編者は、この主題がフランス各地方に見られることを指摘し、例のシャンソンを引用している。

『帰郷』*Le Retour*という表題にこだわるとすれば、シャンソン自体いくつかの異稿を持っていて、『水兵の帰還』*Le Retour du marin*の題名で知られてい

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

るものもある。

そしてまたマルグリット・デュラス原作の映画『かくも長き不在』は、ジャンソンの中のマダムと同じくカフェのマダムである女主人公の前に、一人のまぎれもない浮浪者が現われる話である。この映画を見たとき、まだ十代であった私は、如何に夫に似ているとは言え、こんなにも惨めたらしい男に心を寄せる女主人公には何とも感『情移入し難い』と思ったものだが、フランス文化に慣れた人間は、むしろその乞食みたいな風態によって物語感覚を刺激され、画面にある情感のヴェールをかけることができたのであろう。

事情に疎い日本人の私でさえ、すぐにも類型を見つけられるのだから、おそらく他にいくらかもあるのだろう。それも、女性雑誌の続き読み物とか大衆向け娯楽映画では、もうお馴染みの主題であるのに違いない。

そう言えば大仏次郎の『帰郷』（仏訳題名 *Le Retour au pays*）も、日本の復員兵が妻の再婚を知るという出だしたが、『鞍馬天狗』の執筆にあたってアレクサンドル・デュマなど十九世紀フランス大衆小説の豊かな読書経験を駆使したと言われるこの作家が、『帰郷』の着想に際して、フランスでは一般的な

この主題をどの程度意識していたか、興味あるところだ。

このように言い出すと、文学研究で言うところの源泉とか先行作品などの方法が思い浮かぶのだが、私が考えているのはそういうことではない。そのように個々の作品の間に共通する主題とか関係といったものではなくて、そのような小さな型を無数に修得し、それらを融合させた後に出来る一つの巨大な小説像のことなのである。あるいは、小さな規則、小さな約束を積み重ねた挙句に完成されるエチケットの体系のようなものだと言っても良いかもしれない。この体系を完璧にマスターすると、人はかえって自由になって、どんな状況にも臨機応変に対応できるようになる。しかしだからと言って、無数の約束に縛られていることに変わりはなく、また約束自体が人為的なものであることにも変わりはない。

そのようにして存在する小説像とか小説感覚は、エチケットと同じように、かなり地域差のあるものである。ここでは優雅な物腰もあらうでは奇妙に映る。こちらでは当然なお世辞も謙遜も、向うでは通じずに誤解を招く。肝心

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

なのは相手に対する思いやりです、などと言って、それも確かにその通りには違いないけれども、そればかりでないことも事実である。小説もまた、何を書くのも自由、と言い切って決して間違いではないのだが、ひとつ観点を変えてみると、暗黙の了解でがんじがらめの代物なのである。

さて、そうした小説的土壌のようなものが定まると、今度はそれをふまえた上での個々の作品の働きが問題になる。一旦枠をはめられたあとで、思う存分のあばれ方をしようというわけだ。あるいは、思いもかけぬ鎮まり方、深まり方を見せようというわけである。

となるとこれはまことに単純な力学の問題で、力を大きく発揮させるためには抵抗を大きくすることが必要になる。話はおおよそこうなるだろうと、作者と読者の間には一応の了解がついているから、そうは簡単に問屋がおろしてなるものかと、作者の方では読者をじらす。読者の方でも承知の上で、最後の感動をより大きくするために、じらされるのを喜ぶのである。それはちょうど、相撲で早々と勝負をつけてしまわずに「みあって、みあってえ！」と、時間を稼いで力をためこむのと同じ理屈だ。相撲にしても、最後には取

組むことが分っているから良いようなものの、ものを知らぬ外国人が、あれは戦う気がないのではないか、ひよっとしたら勝負は流れるのではないかと心配しながら見ていたら、面白さも半減するだろう。

ことは精神エネルギーの力学の問題である。力学だから、エチケットと違って、その原則は地球上のどの地点でも働いている。ひと頃大流行したやぐざ映画などは、最も日本的なもののひとつだと思われるが、その感動盛り上げ機の仕組みはすこぶる簡単なものだ。健さん演ずる主人公が悪役の非道に耐えて耐えぬくのも、最後の大乱闘での気持の発散を可能な限り盛り上げるための、いわばテコでしかない。暴力はやめろ、そう言い置いて死んだ親分の教えを守るのだと、主人公は頬をひきつけて言うけれども、その言葉を本当に信じている観客など一人もいない。最後に男一匹撲り込みに行く彼の背中に「よおろし！」と一声かける、その声がい切り太くなるように、おなかに力をためこんでいるのだ。

仕組みは簡単で、原則は初級力学だから、その機械を利用することは簡単

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

この上ない。ただし、それにはある程度の手ほどきも必要である。どの把手をどの方向に押すべきか、あるいは引くべきか、その結果どこに働きが現われるか、その程度のことは知らなくてはならない。

種を明かせば単純至極なやぐざ映画にしても、たとえばここに、外国人か、あるいは鬼と桃太郎が最後には仲良しになるといふ昔ばなしで純粹培養された若者がいて、映画の前半で、「なるほど、暴力はいけない。暴力を抑えるのは勇気のいることだ」と大いに感動してしまったとらどうだろう。最後になつて足場を失い、ズッコケルこと間違ひなしである。ずいぶん馬鹿げた話のように思われるかもしれないが、しかし外国小説の話などしていると、こういう誤解というのでもまああることなのである。

さて、コツが分つてしまうと、あとは精神エネルギーをなるべく大きく、なるべく効率よく解放、発散させるのが肝要ということになる。そのためには多少の嘘も不合理もいたし方ない。大筋の了解さえついていれば、嘘は嘘なり、不合理は不合理なりに、かえつて遊びにもなる。その遊びこそが、不合理こそが見どころになる。

そもそも考えてみれば、ストーリー展開の面白さにとって、嘘や不合理は不可欠のものでさえある。ことのついでに健さんに再度ご登場いただくすれば、しばらく前に『しあわせの黄色いハンカチ』という映画が話題になった時のこと。この映画を見たある頭の良い、と言うことはつまり批判精神の旺盛な女性がこんなことを言った。夫が刑務所から出てくるのを何年も待つてゐる地味な妻が、その心の証しとして黄色いハンカチを屋根の上に満艦飾のように飾るのは、確かにハツとはさせるけれど、でもあの女に^{ひと}あんな才覚があるのかしらという気がして、不自然な感じがする。それがもし桃井かおり演ずるところの脇役の女なら、さもありなんとうなづけるのだけれど、と。

この指摘は私が考えもしなかったことで、それだけにおおいに感心してしまったのだが、しかし同時に、これこそが小説なのだとも思つたのだつた。つまり、地味な妻が彼女らしく一枚のハンカチを遠慮がちに示したとしても、あれほどの感動の噴出は起こり得ない。

また逆に満艦飾にしたのが派手な脇役の女だったとしても、少しも意外で

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

ないばかりか、彼女に関しては既にエネルギーが発散してしまっているのです、何のことはないのである。そんな具合に不自然や不合理は、小説にとって欠かせない薬味なのだ。

その薬味をたっぷりと言ってみればニラレバ妙めふうにたっぷり使って出来上ったのが、『水夫が戦争から帰るとき』というシャンソンだと言えないだろうか。そしてあらゆる感覚的楽しみは、分る人にしか分るまいという排他性をもその刺激剤として利用するのが常であるので、私のように「ええっ！水夫が夫？どうしてそうなるの？」と、間の抜けた驚き方をする者もあるに違いないと、予めそれをも計算に入れた面白さと相成ったわけである。じつに文化とは、何とも意地の悪いものではないか。

さて、このシャンソンひとつでこりごりしたというわけではないのだが、最近そうした文化の底意地の悪さとも言ったものが、とても気になるようになってきた。小説について言うならば、決して字づらに現われないところで、書き手と読み手が共有している暗黙の了解の数々、その集積としてのある隠れた、しかし巨大な小説像のことである。

その小説像は、直接的なたちで捉えることはできないのだが、しかし個々の作品はどこかでそれにつながっており、その断片として存在していて、それを感じさせ、それを彷彿とさせることで「小説」になる。そのような小説像があるのではないか、と思うのだ。そのような小説像にからめとられ、がんじがらめになりつつも、小説たちはそれに支えられ、生かされているのではあるまいか。

と言うと、こんな反論がもう聞こえてくるようだ。云わく、そういう既成の小説像・小説概念も存在するかもしれない。しかしそれは次元の低い問題だ。いわゆる大衆小説に見られる現象にすぎないのではないか。もっと高度に芸術的な作家や作品は、そうしたものは無関係であるに違いない。彼らが目指している新しい主題、新しい文体の探求には、そんな型にはまった低俗ストーリーは影響を及ぼすわけではない、と。

本当にそうなのだろうか。もし本当にその通りであるのなら、私としては言うことはない。たぶん低俗なのは私ひとりで、物ごとの核心を見通す眼

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

を持っていないか、やぶにらみであるのだろう。それも大いにあり得ることである。

しかしもしそうでないとしたら、ひとが小説を読みながら、心の奥深く、琴線とか何とか言われているあたりで、ひそやかに戦くものがあって、ひとりひとりが自分の内なるその戦きに耳を傾けながら、何とも言いようがなく甘美な思いに駆られ、それが後めたいほどに甘美であるものだから、それについてには敢えて口にしようとしないう、あるいはほんの一言か二言しか触れないとしたら、そして何も言わずに、しかしお互いどうし共有していることを確信しているような何かがあるのだとしたら、それを知らないで同じ小説を読んでいる私は、いったい何を読んでいるのだろうか。

そしてまた、一人の物書きとして成長するまでの少年期・青年期に、ほとんど数えきれないほどの臭みや癖を身にまとりつかせ、その挙句、身も心もがんじがらめになったのを感じている前衛作家が、それを振り捨て打ちこわすために捨て身の暴力に身を委ねているとき、それが何に対する反逆なのか感じとることができないとしたら、それは家庭内暴力の息子が母親に向か

って振り上げるこぶしを、新奇なグンスだと感心して眺めるのと同じほどに空しいことだと、思わずにはいられないのである。

人が大声あげて言うことには嘘が多いということを、近頃痛感している。人の言うことには裏がある。裏の裏がある。その肝心な裏のことを人はあまり語らない。

しかし語らないことをもって嘘だとか意地が悪いとか言うのも、また正当ではないのかもしれない。自らそれを知らずにいるということもある。また知っていても、とうてい把握し切れないものでもある。いや、知らずに、無意識のままどっぷりと浸り込んでいるというのが、案外もっとも自然な生き方なのだろう。

これまでフランス小説について考えてきて、個々の作品の背景としてある小説像のようなものを感じるようになったのは、だから、それなりの進歩だと考えても良いのかもしれない。しかし、そうした小説共同体の外部からフランス小説に近づいていった私にとって、その小説像の予感、すでにそれ

ある誤り

— 日本の小説・フランスの小説 1 —

だけでもうある挫折感なしに受けとめられないものであることも事実である。そしてそれは同時に、私の周辺に、もうひとつの妖怪のように存在しているらしい日本の小説像のことも考えさせずにはおかないのだ。

いずれにもせよ、実体を捉えがたいものの影におびえるばかりの私にしてみれば、まるであのシャンソンの水夫のように、遠い国での戦いに刀折れ矢尽きて帰ってみると、生涯の伴侶たるべきひとは既に再婚していて、もはや身を落着ける場所も無かったと、そんなことにもなりそうな気がして、心配である。

(初出一九八三年 「ふらんす手帖」 12号)